

メルロ＝ポンティに於ける「客観化のプロセス」

* 渡 辺 亮

はじめに

- 1 現象学的身体論とは何か
 - 1-1 人間の身体というもの
 - 1-2 〈私〉が身体であるということ
 - 1-3 身体現象の両価的現前
- 2 〈私〉の身体現象の空間性、運動性
 - 2-1 身体現象の空間性の形態
 - 2-2 具体的運動と抽象的運動
 - 2-3 身体的な指向性
- 3 客観、客観性とは何か
 - 3-1 客観、客観性とは何か

結論

はじめに

本稿では、後期フッサールとの関係で、メルロ＝ポンティに於ける客観化のプロセスをたどり、浮かび上がる身体的な指向性の特徴を明らかにする。

後期フッサールのテキスト『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』に即せば、現象学以前のいわゆる客観的諸学では、客観を即自的な存在であるとしばしば考えてきた（ここでいう即自的とは、主観の認識、知覚からは独立し、予め出来上がっていることをいう）。それに対してフッサールは、客観は即自的な存在ではなく、世界の原理を知るためには、むしろ客観化するものとしての主観性を明らかにしなくてはならないと思いついた。さらにフッサールは客観的諸学の成立の仕方を問う必要を主張した。いわば客観的諸学の外側から、それらの学と異なる手法で、それらの成立する過程、根拠を明らかにしようとしたのである。

メルロ＝ポンティはフッサールの着想を受け継ぎ、客観的諸学の体系つまり客観的世界に対置する、前客観的（préobjectif）世界¹の有り様を記述することを試

みた。

端的には、客観的世界とは普遍的な主観や諸物が即物的に存在するだけの世界である。客観的世界の構成主体はこの世界の内にはいない。構成主体は客観的世界の外つまり前客観的世界にいる具体的な〈私〉である。〈私〉は客観化、普遍化することで、客観的世界を構成しているのである。言い換えれば客観的世界は、前客観的世界によって「養われている」のだ。

さて、このテーマで本稿を著す現代的な意義とは何か。メルロ＝ポンティの著書『知覚の現象学』が1945年に出版され、約80年が過ぎた。しかしフッサール研究自体、メルロ＝ポンティ研究自体が、客観的諸学の研究方法で行われている懸念がある。つまり、客観的諸学に依る現象学研究は進んだが、前客観的な現象学は進んでいない可能性が、必ずしも否定できない。この僅かばかりの可能性に鑑み、現象学の祖であるフッサールとの関係で、再度、メルロ＝ポンティ自身の記述を読み直すことで、現象学の本来の理念に沿った、客観化するものとしての主観性の解釈を探ることが本稿の意義である。

先行研究としては、澤田哲生（2012）はシュナイダー症について論じているが、患部が身体的な指向性

* 名古屋大学大学院学生

にあることに留意する文は見受けられない。森脇善明(2000)は、シュナイダー症の患者が支障をきたす抽象的運動の一部に客観化する能力が内在することや、患者は抽象的運動を実現する指向弓が弛緩していることについて、『知覚の現象学』の記述を確認はしている。それらの先行研究を受けて本稿では、身体的な指向性の客観化する能力が、或る一つの対象を客観化するというのではなく、前客観の世界を開くことを示す。さらに客観的世界に前客観的世界を対置することが現象学の本来的な目的であることを、後期フッサールとの関係で示す。

本稿の第一節では、デカルト、フッサール、メルロ＝ポンティの身体についての考え方を確認し、その変遷を追う。第二節では、具体的運動と抽象的運動の区別により、身体的な指向性に抽象化する能力があることが明らかになるのだという、メルロ＝ポンティの主張をみる。それらの議論を受けて、第三節では客観、客観性とは何かということを変更して検討する。

1 現象学的身体論とは何か

1-1 人間の身体というもの

デカルトの身体論

近代以後の西洋思想に於ける、身体概念形成に決定的な影響を与えた人物の一人に、ルネ・デカルトがいる。主として1600年代前半に活躍した彼は『省察』を著し、人間や神についての考察をまとめた。その文章の内、第二省察では、「人間」という存在を“明晰判明で純粋な理性としての精神”と“空間の一部を占める物体としての身体”という二元論によって論じた。そこでは、私とは精神であり、身体は精神による認識の対象であったのだ。身体それぞれの部分は部分外部分、つまり機械の或る部品とまた別の部品のような外的な関係である。『省察』では精神と身体について以下のように書かれている。

しかし、それでは私とは何であることになるのか？考えるものである。これはどういうことか？すなわち、疑い、理解し、肯定し、否定し、欲し、欲さず、また想像し、感覚するものである (Descartes 1990, p. 63)。

ここではむしろ、私が何であるかを考察するたびごとに、何がおのずからかつ自然に、私の意識にこれまで現れてきたかに注意しよう。まず最初に現れたのは、私が顔、手、腕、およびこれらの肢体からなる全機構 (cette machine d'organes) を

もつ (avais) ということである。それは死体においても認められ、私はそれを身体という名で呼んだ (Descartes 1990, p. 55)。

このような考察を含めた第二省察では、感覚や想像は明証性に欠け、確かなものとは主観の精神によって判断される限りのものであるという結論に至る。

現象学の見地からすれば、この心身二元論は思想上、観念論や経験論などの考え方に継承された。さらに現代的な生理学や医学にも基本的に受け継がれていると言えるだろう。生理学では感覚を、刺戟とそれを受け取る受容器、さらにそれを認識する記録係としての脳というように、物理的な事象として捉えたのである。このように認識の対象とされた身体は客観的な存在として概念化されている。

フッサールの身体論

さて、上記のように身体を扱う諸学問に原型を与えたデカルト的分析を批判、再検討した人物がエドモンド・フッサールである。

彼は身体の特徴としていくつかの点を指摘した。例えば、主観の身体のある場所はいつも“此处”であり、それはさしあたって世界の中心であること、また主観が他者を認識する際には、第一段階として他者の身体を認識し、そして主観が他者とコミュニケーションをする際には互いの表情や仕草を介して相手の心情を知ることなどである。これらのことを彼以前の身体論と端的に比較すると、彼の身体論では、身体は主観に、より直接的に現前する特殊な存在であることが見て取れる。

その基本的な考え方が分かる文章をフッサールの『デカルト的省察』から引用しよう。

さて、次にこのような自然における自分固有なものとして捉えられた物体のなかに、私は唯一独特の仕方ですら私の身体を見出す。これは、単なる物体ではなくまさに身体であるような唯一のものであり、私の抽象的な世界の層の内部にあって、私が経験によって - (触覚の場、寒暖の場、といった) さまざまな所属の仕方においてではあれ - 感覚の場をそれに帰する唯一の客観であり、私とその「うちで」直接に「自分の思い通りにでき」、特にそのそれぞれの「器官」のうちで支配している唯一のものである。私は手で運動感覚的に触れることで知覚し、同様に眼で見ることで知覚し、等々と知覚し、常にそのように知覚することができる。

その際、これら器官がもつ運動感覚は、「私はする」という仕方で経過し、私の「私はできる」に従うことになる。さらに私は、この運動感覚を働かせることによって、突き当たる、押しやる、といったことをすることができ、それによってまず直接に、ついで間接に、身体的に「行為する」ことができる。

（フッサール（浜渦辰二 訳）『デカルト的省察』岩波文庫 岩波書店 pp. 174-175）

私が認識する諸物の内で、自分に固有なものである点に身体という物体の特殊性があるとされる。「器官」という言葉を使いつつ、機械論的に身体をイメージしているようである。「私はその『うちで』」とあることから、この引用文中の「私」とは意識であるところではさしあたり考えて良さそうだ。つまりデカルトが『省察』において、理性（＝精神）と物体としての身体という二項に分けて「人間」について論じた型が踏襲されているのである。

一方で『「私はできる」』や「身体的に『行為する』」などの表現も見受けられる。これらの表現は身体を、感覚の場に所属するため、また知覚や行為の実現のための手段でもある、まさに特殊な物体として捉えていることの表れであろう。身体をこのように概念化することは、後のメルロ＝ポンティの身体的な現象学にも影響を与えている。

しかし両者の間には決定的な違いがある。それは現象学を標榜しながらも、身体を主として物体として論じるか、メルロ＝ポンティのように身体を主として現象として論じるかという点にあるのだ。

1-2 〈私〉が身体であるということ

メルロ＝ポンティの身体論

デカルトやフッサールの身体についての概念が、「主観の身体というもの」であったとすれば、メルロ＝ポンティの身体についての概念は、端的には、「〈私〉が身体であること」などと言えるのではないだろうか。

1-1で例に挙げたように、現象学以前の客観的諸学に於いて主観は絶えず客観化、普遍化、抽象化された後の存在であった。対してメルロ＝ポンティが記述したのは主観を客観化、普遍化、抽象化する前の、前客観的、具体的な主観である。『知覚の現象学』では、jeとともにle Jeと表記されている例が見受けられる。著者はこれに鑑み、この前客観的な水準の主観を〈私〉と表記したい。

現象学とは、〈私〉が経験しているがままの現象を記述することを目指した学問である。それ以前の諸学のように、構成したり、説明したりという方法を探るのではない。この記述するという方法こそが〈私〉にアプローチする可能性を有している。

メルロ＝ポンティの身体論では、主に現象としての身体が論じられている。身体の物体としての側面が論じられていないのでも、否定されているのでもない。しかし身体が物体として知覚されるのは身体現象に物的側面をもって現れることによってである。つまり現象こそが〈私〉にとって一義的なのだ。身体は、まず“もの”ではなく、“こと”として主題化されなくてはならない。

さて西洋思想史の流れがフッサールに至るまで、意識と身体は全くもって分化した存在であった。そして主観とは意識であった。しかしメルロ＝ポンティが論じる際、〈私〉の現象を意識と身体に分化しては論じられないことが例えば「…運動は不可分に運動でもあれば運動の意識でもあるのだ」（Merleau-Ponty 1945, p. 128）や「意識とは、原初的には〈われ推う〉ではなくて〈われ能う〉である」（Merleau-Ponty 1945, p. 160）といった言葉で表現される。これらの言葉は〈私〉が経験している現象に於いて、意識と身体が未分化に現象していることを実感させる。意識のみならず、身体現象をも主観にとっての直接的な出来事として捉え、〈私〉が身体であるということを記述できる可能性が生まれたのである。

ところで現象学は、〈私〉の経験しているがままの出来事を記述するのであるが、その際、どのような知覚経験に着目されたのであろうか。『知覚の現象学』では、空間の経験にも言及される。

身体の空間性は、位置の空間性（spatialité de position）ではなく、状況の空間性（spatialité de situation）であるとメルロ＝ポンティは言う。

位置の空間性とは、客観的空間の普遍的形式のなかに見いだされる諸物の空間性である。対して身体の空間性は状況の空間性である。実際の運動の場面で〈私〉は、客観的空間の普遍的形式に於いて、座標計算により認識した目的の位置まで身体を動かすというのではない。〈私〉は、〈此処〉に状況を見出し、且つ目的を実現するために、身体を行使するのである。

空間の一部を占める、何枚かの綴られた大きなべらべらした物や、よく反射する棒状の何かと同じようには、身体である〈私〉は在るのではない。身体である〈私〉は、それらを書き込まれるカレンダーとして、また書き込む万年筆として、一つの状況下におき、スケ

ジュールを書くという目的を達成するのである。

身体とは世界を状況化し、〈私〉がそこへと参加するための“媒質”である。ある世界をそのような意味的世界として、諸物を諸物として、万年筆を万年筆として在らしめるのも、身体能力によってであるのだ。

それと同様に客観的空間も、〈私〉の身体によってそのようなものとして基礎づけられることによって初めて有り得る、というメルロ＝ポンティの主張は、以下の節で見ることにする。

1-3 身体現象の両価的現前

幻影肢 - 習慣的身体と現勢的身体

幻影肢とは、既に失われてしまった腕や足などがまだ存在しているかのように痛みや痒みを感じるという現象のことである。この現象について心理学、生理学はそれぞれに分析を行った。

幻影肢には一方で、「負傷時の情動や情勢を思い出させるような情動と情勢があらわれたとき、いままでは幻影肢などもたなかったような患者たちにも、幻影肢があらわれるのである」(Merleau-Ponty, 1945, p. 91) という、学問分野としては心理学の範疇に入れられる特徴がある。

他方では「脳に通じている感受的伝導路を切断すれば幻影肢が消失するという[生理学的]事実」(Merleau-Ponty, 1945, p. 91) があるという特徴も持ち合わせている。

しかし結局は心理学も生理学も幻影肢を真に解明することはできなかった。

それに対してメルロ＝ポンティは、我々が世界内存在であるという事実をもって答える。心理学や生理学という客観的諸学の対象とされる前の、患者が経験しているがままの前客観的な意味的世界を捉え、幻影肢という現象を記述するのである。

幻影肢の症例にあつては患者は手足の切断を否認して、その幻影肢をまるで現実の手足とおなじように当てにしているかに思われる。何しろ彼は、その脚の幻影でもって歩こうと腐心し、転んでも意気沮丧しないくらいなのだから。ところがその彼としても、別のところでは幻影肢の特殊性を、たとえばその独特な運動性を非常によく記載しているのであり…。…切断手術を受けた人が自分の[その切断された]脚を感じずその仕方は、あたかも私が目のまえに居ない友の存在をそれにもかかわらず活き活きと感ずることができる、その仕方に似ている (Merleau-Ponty 1945, p. 96)。

つまり患者本人にとって幻影肢とは、その肢が、或る水準 a では在り、別の或る水準 b では無い、ということなのである。

肢体がある水準 a とは例えば歩行の場面である。歩行の際、患者は正常人と変わらず自分の動かすべき脚をはっきりとは意識せずに行おうとする。脚が在るものとして歩こうとするのは、脚を切断する前に獲得した歩行する“能力”としての身体が切断後も継続しているからなのだ。つまり切断の前後を通して歩行する能力が、習慣として保持されているということである。ここから、身体である〈私〉の内に、“はっきりと意識せずとも行える或る種の運動”を実現する、ほとんど非人称的な (impersonnel) 実存の周縁が見いだされる。このような運動とは習慣化された運動のことである。この実存の周縁をメルロ＝ポンティは習慣的身体 (le corps habituel) とした。

水準 b では患者は幻影肢を、まさに幻影であるとして、肢体は既に失われたものとして、はっきりと分かっている。つまりそれは身体現象である〈私〉の内、人格的な (personnel) 実存に於ける現象なのである。メルロ＝ポンティはこれを、現勢的身体 (le corps actuel) であるとした。

幻影肢とは、習慣的身体と現勢的身体がそれぞれ別の現れ方をするというに他ならない。

さて両価的現前は幻影肢の患者に限ったことではない。目のまえに居ない友の存在を活き活きと感ずるといふ例のように、世界内存在である〈私〉にはしばしば経験される現象であるのだ。さらに『知覚の現象学』の文中では抑圧が例として挙げられ、それらに共通する世界内存在の時間的構造の一端に言及される。つまり抑圧とは「われわれは、かつてあの青春の恋のなかにまきこまれていた人、あるいはかつてあの家族的世界のなかに生きていた人そのままでもありつづけている。…非人称的な時間の方は流れ続けるが、しかし人格的な時間の方は膠着したままである」(Merleau-Ponty 1945, pp. 98) といった状態のことである。

幻影肢と抑圧に関して、現象学的観点から次のことが確認できる。

私の人格的な実存のまわりに、一つのほとんど非人称的な実存の周縁が姿をあらわしており、これはいわば自明のものとして、私が自分の生存維持の配慮から頼りにしているものであり、また、われわれ各人がみずからつくった人間的世界のまわりに、一つの一般的な世界が姿をあらわしてお

り、これはわれわれが〔個人的な〕愛とか野心とかの特殊な環境のなかに没頭することができるためにも、まず所属しなければならぬ世界なのである（Merleau-Ponty 1945, p. 99）。

「ほとんど非人称的な実存の周縁」とは世界への、「前人称的な加盟として、無名で一般的な実存として、私の人格的生活の下で一つの先天的コンプレックスの役割を果たしている」とメルロ＝ポンティは述べる。そして「ほとんど非人称的な実存の周縁」とは、はっきりと意識せずとも行為が実現される能力、習慣的身体であると、また「人格的な実存」とは現勢的身体であると、理解できる。

2 〈私〉の身体現象の空間性、運動性

2-1 身体現象の空間性の形態

本節では『知覚の現象学』での、身体の空間性についてみていこう。

まず形態（forme）という語彙について確認する。

メルロ＝ポンティはこれをゲシュタルト心理学の意味に於いて使用する。多くの知覚論では、例えばインクで書かれた或る文字を知覚する場合には文字の在り方についてのみ語る。しかしゲシュタルト心理学では、背景となる白い紙が文字を支えるように際立たせているからこそ文字はそれとして知覚されるのだとされる。背景となる白い紙と、その上に浮かび上がる文字からなる“一つの全体”が原初的にあり、それにより知覚が可能となるのである。仮に或る紙の上に、その紙と同じ色のインクで文字が書かれたのなら、文字が知覚されることはないであろう。“一つの全体”はどのような知覚にもあり、その内で浮かび上がる方を“図”と、支える方を“地”という。このように図と地から成る一つの全体をゲシュタルト心理学では形態というのである。この形態は、全体が諸部分に先立つような現象である。

さてここで次の文を引用しよう。

身体図式はダイナミックなものだと心理学者はしばしば語るけれども、この言葉をその正確な意味で捉えてみると、それは私の身体が現勢的または可能的な或る任務にむかってとる姿勢として私にあらわれる、という意味である。そして実際、私の身体のもつ空間性は、外面的諸対象のもつ空間性や〈空間的諸感覚〉のもつ空間性と同一ような一つの位置の空間性（spatialité de position）ではなく

て、一つの状況の空間性（spatialité de situation）なのである（Merleau-Ponty 1945, p. 116）。

身体図式という語を、行為を実現するための“媒質”としての身体を概念化した表現として捉えることも出来るであろう。〈私〉はその時々々の行為を実現する際、身体図式は一つの全体として展開するのである。

私が立って居て、私のパイプを手で握りしめているという場合、私の手の位置というものは、私の手が私の前腕とのあいだでとる角度、私の前腕が私の上腕とのあいだでとる角度、私の上腕が私の胴体とのあいだでとる角度、最後に私の胴体が大地とのあいだでとる角度 – といったものから次々に推論されて行って決まるものではない。私は自分のパイプがどこにあるかを、一つの絶対知によって知ってしまっているものであり、まさにそれによって、私の手がどこにあるか、私の身体がどこにあるかも知っている…（Merleau-Ponty 1945, pp. 116-117）。

このような絶対知をもつとは即ち〈私〉が身体であるということである。その身体は一つの形態であり、一つの全体であり、諸部分は内的に交流しあっており、〈私〉の内面である。機械論的な部分外部分ではなく、外面的座標によって位置が決められているのではない。

さて図と地から成る形態の概念を確認した。また〈私〉の身体の空間性が、現勢的な状況の空間性において現れるということもみた。次に我々が目を留めなくてはならないのは次の一文であろう。

空間性に関して言えば、自己の身体とは、図と地という構造にいつも暗々裏に想定されている第三の項であって、一切の図は、外面的空間と身体空間との二重の地平の上に姿を現すわけである（Merleau-Ponty 1945, p. 117）。

身体の空間性は図と地という形態で表現できるのであるが、その構造は二重の地平をもつというのである。身体空間（l'espace corporel）と外面的空間（l'espace extérieur）の二重の地平をもつとはどういうことなのか。身体空間（身体図式、現勢的状况に対してとる姿勢）は内的であり、外面的空間（外面的諸対象のもつ空間性、さらに〈空間的諸感覚〉のもつ空間性）は外的であるというような区別には問題は無いで

あろう。しかし両者を地平として〈私〉の身体が展開するとはどのようなことなのか。

この“二重の地平をもつ形態”に気を留めながら、先へと進みたい。

2-2 具体的運動と抽象的運動

メルロ＝ポンティは身体の空間性の議論を深めるためにシュナイダー症の症状について言及する。その患者は目を閉じている時には命令に基づいて手や足を動かすような〈抽象的運動〉はできない。〈抽象的運動〉を実現できるのは動かすように命令された手や足を見ることができる場合と、全身による練習を予め行っておいた場合だけである。

これらの特徴を持つシュナイダー症の患者は、鼻をかむことや掴むことは出来るが、鼻を指示することが健常者のようには出来ない。また患者は、自分の身体のある箇所を蚊に刺された場合、その箇所を自分の手で触れることができる。しかし自分の身体のある場所を他人に触れられた場合、その場所が何処なのかを指示できないのである。

では、実現できた運動と、出来なかった運動にはどのような違いがあるのか。

メルロ＝ポンティは、身体は運動を実現する“能力”であるという観点から、二つの場合を区別する。つまり自分の身体を自分で〈掴む〉または〈触れる〉運動とは実際の状況における具体的運動であり、自分の身体のある場所を〈指示する〉運動とは客観的、実験的状況における抽象的運動である。

蚊に刺された病人は、その刺された箇所がどこであるかをわざわざ探しにゆく必要はなく、一挙にその箇所を見だしてしまう。というのは、彼にとっては、その箇所を客観的空間のなかの座標軸との関連において位置づける必要はなく、自分の現象的〔主體的〕な身体の痛みを感じた或る場所に、自分の現象的な手でもってふれにゆきさえすればよいのだからであり、搔く能力としての手と搔くべき箇所としての刺された箇所とのあいだには、自己の身体の自然的大系のなかで一つの生きられた関係があたえられているからである。操作は全面的に現象的なものの次元でおこなわれているのであって、何も客観的世界を経過してはいない（Merleau-Ponty 1945, pp. 122-123）。

蚊に刺された場所に〈触れる〉というのは「自分の現象的〔主體的〕な身体」の水準で行われる運動であ

る。引用文中の〔 〕で示された語句は日本語版への訳者により補足されたものである。本稿の著者はここへさらに“主観的、内的、内属的”という近い意味の語を付け加え、“客観的な世界”を経由する〈指示する〉という運動との区別を厳密にしたい。

さて、〈触れる〉という具体的運動と〈指示する〉という抽象的運動の違いを、メルロ＝ポンティは、ゲシュタルト的構造をモデルに、「具体的運動の背景はあたえられた世界であり、これに反して、抽象的運動の背景は構成された世界である」（Merleau-Ponty 1945, p. 128）と説明する。

つまり二種類の運動は異なる形態をもつのだ。具体的運動の地は身体である〈私〉にあたえられた（est donné）世界であり、抽象的運動の地は身体である〈私〉に依り構成された（est construit）世界である。そうであれば二種類の運動は前客観的な存在である、シュナイダー症である〈私〉にとっての意味合いが違うのだ。運動を実現する“能力”としての身体にとっての意味に於いて、二種類の運動は区別されねばならない。

抽象的運動は、具体的運動が展開していた充実した世界の内部に、反省と主観性との一地帯を穿ち、物理的空間のうえに、一つの潜勢的または人間的空間を重層する。したがって、具体的運動は求心的であり、これにたいして、抽象的運動は遠心的である。前者は存在のなかで、あるいは現勢的なもののなかでおこなわれ、後者は可能的なものなかで、あるいは非存在のなかでおこなわれる。前者はあたえられた背景に密着し、後者はみずから己れの背景を展開する。抽象的運動を可能にする正常な機能は、一つの〈投射〉機能であって、それによって運動主体は、自然的には存在せぬものもそこでは存在のみかけをもつことのできるような一つの自由な空間を、自分の前に用意するのである（Merleau-Ponty 1945, p. 129）。

この引用文の前半は二種類の運動の形態の特徴をよく表現している。この説明の通りであればこそ、正常者である、つまり具体的運動と抽象的運動の両方を行える〈私〉において、「空間性に関して言えば、自己の身体とは、図と地という構造にいつも暗々裏に想定されている第三の項であって、一切の図は、外面的空間と身体的空間との二重の地平の上に姿を現すわけである」のだ。

さて引用文の後半には“投射（projection）”という語が使われている。抽象的運動を可能にするのが本当

に投射機能であれば、これについて詳しくみる必要があるだろう。

2-3 身体的な指向性

シュナイダー症の検討がさらに進められると、身体的な指向性の働きに言及される。ここでは、その過程に眼を向ける。

…病人たちは、或る迷路のなかに入れられて一つの行きどまりにぶつかると、〈反対方向〉を見いだすことがなかなかできない。また、彼らと医師のあいだに定規が置いてある場合、命令に基づいて幾つかの物体をあるいは〈自分の側に〉あるいは〈医師の側に〉配分することができない。…それというのも、以上のどの操作にも、あたえられた世界のなかに境界や方向を設定したり、力線を確定したり、展望を配慮したりする同じ能力が必要だからであり、一言で言っても、あたえられた世界をそのときどきの投企にしたがって組織し、地理学的な囲み（l'entourage géographique）のうえに、主体の内的活動性を表出する行動環境なり意味体系なりを構築する同じ能力が必要だからである（Merleau-Ponty 1945, p. 130）。

上記の文は患者の空間性、運動性を述べたものである。「地理学」は客観的、抽象的な学問の一領域である。そして「構築する」と訳された語は、原文では *construire* であり、これは「抽象的運動の背景（地）が構成された（*est construit*）世界である」という時と同じ語である。また、引用文の最後には「主体の内的活動性を表出する行動環境なり意味体系なりを構築する同じ能力」とある。引用文の前半にあるような病状と、自分の身体の或る場所を〈指示する〉運動が困難になる病状が、抽象的運動を実現する能力の弱体化に起因するのであれば、正常者にとっても、自身の在り方に根元的に関わる能力であるわけだ。

ところでメルロ＝ポンティは、視覚が病んでいるのだとした古典の心理学に対して、病因は感覚の一領野などではなく、もっと深くに有る「患者の生活の土俵であり、あの世界への開在性・現勢的には手の届かない諸対象をして、それにもかかわらず正常者にとっては考慮に入れられ、彼にとっては暗々裏に存在しており、彼の運動世界の一部をなしている対象たらしめている所以のものである」（Merleau-Ponty 1945, p. 136）と解釈する。

また述定的判断をする精神が病んでいるのだとした

主知主義に対して、メルロ＝ポンティはアナロジーを理解出来なくなった症状に鑑み、患者は世界へと向かう際の“前述定的明証性”をもっていないのだという。前述定的という表現は、主知主義的意識による分析が“述定的”だと形容されることをイメージしてのことであろう。

明晰な理性としての精神に依るのではない明証性とはどのようなものであろうか。それは“沈殿”という現象学的概念によって説明される。

〈私〉が実際に概念の獲得や判断、知的な総合をするのは、或る具体的な場面である。その時、〈私〉は何も確かだと思えるものない状態から総合を始めるのではない。それ以前に総合したものや記憶、習慣としてあるものなど、改めて意識的に分析しなくとも明証的だとさしあたって言えることがある。それらは〈私〉の思考において、地であるように働くのだ。思惟に於いても運動に於いても、習慣化の作用つまり“沈殿”こそ前述定的明証性をもたらす。

そして“沈殿”には“自発性”という対概念がある。この対概念があつてこそ“沈殿”は正常に機能するのだ。ひとたび沈殿した事柄、獲得された思惟は、絶対的、無時間的に成るのではなく、自発的な作用としてその時々々の〈私〉に依って取り上げ直され、あるいは取り上げ直すことを〈私〉に要求する。沈殿した事柄が沈殿し続けられるのは、そのつど捉え直されるからなのだ。

世界なる構造は、沈殿と自発という二重の契機をもって、意識の中心部に座している。そしてこの〈世界〉の平準化としてのみ、われわれはシュナイダーの知的障害、知覚障害、運動障害を同時に了解することができるようになり、しかもそれらの一つを他のものに還元してしまうこともなくすむのである（Merleau-Ponty 1945, p. 152）。

沈殿と自発性の作用が正常者に前述定的な明証性をもたらす。しかし患者に於いてはこれらは機能せず、前述定的な明証性を当てにすることが困難である。

ところでシュナイダー症の症状には、万年筆の知覚やデッサンの作業なども言葉による諸段階を踏まなくては行われないこと、四つの直角二等辺三角形で一つの四角形を構成する（*construire*）ことが困難であることなども見受けられる。さらに計算式や物語の理解に関して、患者はやはり独特なやり方で対処する。

これらの症状を考察し、患者が支障をきたした機能を、メルロ＝ポンティは次のように書いている。

われわれの語っている中心的な機能は、われわれに諸対象を見させたり認識させたりする以前に、それらをもっとひそやかなかたちでわれわれにたいして存在せしめるものなのだから。してみれば、むしろ他の著作から用語を借りて来て、つぎのように言った方がよい・意識の生活（認識生活、欲望の生活、あるいは知覚生活）には、一つの〈指向弓〉（arc intentionnel）が張り渡されていて、これがわれわれのまわりに、われわれの過去や未来や人間的環境、物的状況、観念的状況、精神的状況を投射し、あるいはむしろ、われわれをこれらすべての関係のもとに状況づけているのである。この指向弓こそが感官の統一を、感官と知性との統一を、また感受性と運動性との統一をつくるのであり、これこそが疾病の場合に〈弛緩〉するのである（Merleau-Ponty 1945, p. 158）。

メルロ＝ポンティの現象学において、主観と世界を引用文中にあるような様々な生活、状況として結びつけるものが何であり、どのようなものなのかを解明することは極めて重要であった。世界内存在を世界内存在として在らしめるのはその指向性であるという見解へと彼は至ったのである。

フッサールの指向性はさしあたって意識の指向性であった。しかしメルロ＝ポンティの身体現象を記述した学では必ずしもそうではない。指向性は前意識的な段階から既に、そしていつも働いており、身体的な指向性が意識の働きにちからを貸すのである。

指向性は唯一の対象へ向けて発せられる一本の線としてイメージするのではなく、〈私〉から過去、未来、人間的環境、物的状況、観念的状況、精神的状況へと広がりながら展開する蜘蛛の巣状の広がりとしてイメージすべきであろう。その働きは、いわば前客観的世界の骨組みである。

客観化する能力が作用しつつある場として、メルロ＝ポンティは前客観的世界を見いだしたのだ。

3 客観、客観性とは何か

3-1 客観、客観性とは何か

現象学以前の客観、客観性

『知覚の現象学』の身体論を読み進めると、メルロ＝ポンティが一貫して客観、客観性を強く意識していることが分かる。その際、とりわけ経験論と主知主義は頻繁にとりあげられている。両者の基本的な考え方は西洋思想史上、長きに渡って検討されてきた。

経験論では認識の契機は客観の側にあるとされた。主観は生得的には“白紙（tabula rasa）”の状態で、客観からどのような経験を与えられるかにより主観の在り方が決定する。客観は即自的、つまり主観の在り方からは全く無関係に存在する。

主知主義では認識の契機は主観の側にある。客観の在り方は主観がどのように判断するかということにかかっているのである。しかし一方で主知主義の中心的人物、デカルトは主観も客観も神によって創られたものとし、客観が即自的であると解してもいる。

ところで、客観を即自的なものとするのは両者に限ったことではないであろう。古代ギリシャのプラトンの“イデア界”、中世教父哲学の神の世界、観念論の“物自体”、さらにフッサールよりも後のマルティン・ハイデッガーの“本来性”への理論などでも、認識あるいは世界の契機は客観の側にある。その客観は即自的であり多分に彼岸的ということも多くの西洋思想に共通しているのではないだろうか。

次に客観性について、みてみよう。「学問が成立するためには、その研究対象は客観性をもたなくてはならない。研究対象は普遍的、抽象的で、万人に共通でなくてはならない。」ということは、少なくとも現象学以前の西洋的学問の大前提であろう。個別的な事象や個人に於ける何事かは、学問の対象とはなり得ないという向きの主張である。客観性を確保することが西洋的学問にとって肝要であるのだ。

このような認識の対象としての客観、学問の性質としての客観性に疑問を投げかけたのが現象学である。

フッサールの現象学の企て

フッサールの最晩年の著作『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』から客観に関して言及した文章を引用しよう。この文章で語られていることは、本稿のみでなく、現象学そのものにとって、さらに客観的諸学全体にとって重要な事柄である。

客観主義の特徴は次の点にある。すなわち客観主義は、経験によって自明なものとしてあらかじめ与えられている世界を基盤としてその「客観的真理」を問い、世界にとって、つまりすべての理性的存在者にとって無条件に妥当するもの、つまり世界がそれ自体においてなんであるかを問う。これを普遍的におこなうのが、学的知の、理性的の、つまりは哲学の仕事なのである。…

これに対して、超越論主義は次のように言う。…「客観的に真の」世界、すなわち学問にとっての世

界の方は、学以前の経験と思考にもとづく、ないしその経験と思考によってつくり出された妥当性にもとづく、いっそう高次の形成体なのである。…したがって、それ自体において最初のもは、問われるまでもない自明性のうちにある世界の存在ではないし、また世界には客観的になにかが帰属しているのか、というただそれだけの問いが立てられるべきでもない。むしろ、それ自体において最初のもは、主観である。しかも、世界の存在を素朴にあらかじめ与えておき、次いでそれを合理化し、あるいは、同じことであるが、客観化するものとしての主観性なのである。

（フッサール（細谷恒夫 木田元 訳）『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』 中公文庫 1995 pp. 125-126）

超越論主義つまりフッサールは、客観とは即自的な存在ではないと言う。客観的諸学の妥当性は、主観の日常生活での妥当性に依拠する。客観が客観性をもつのは、主観の客観化する能力によってであるのだ。客観、客観性の起源が“彼岸”から“主観の能力”へと変わると言うことは、認識論に於いての世界の原理が変わると言うことである。

しかしフッサールは、上記の件を新たな学問・現象学の重要なテーマとして主張しながらも、客観、客観性の起源を主観の能力として十分に記述する方法を見つけれなかった。

メルロ＝ポンティの客観、客観性

メルロ＝ポンティの身体論ではシュナイダー症の患者の様子を手がかりに、運動を具体的運動と抽象的運動とに区別した。議論が進められると、抽象的運動が実現されるために必要な投射機能が、さらにその機能や生活の土台としての指向性が認められたのであった。

さて、図形や数式に於ける意味は、まさに抽象的、普遍的であり客観性をもつものである。しかしシュナイダー症の患者は図形や数式の意味を理解しない。加減乗除をすることはできるのであるが、数の概念を、数式の意味を理解することはできないのだ。

また、患者の運動や理解は現勢的、具体的な水準に留まることが多いのであった。ここで身体の空間性の、二重の地平をもつ形態を思い出してみよう。二重の地平とは身体空間と外面的空間である。身体空間とは現勢的状况に対しての運動、姿勢であり、具体的運動はこの地平の上に浮かぶ。外面的空間とは外面的諸

対象のもつ空間性、空間的諸感覚のもつ空間性であり、抽象的運動はこの地平の上に浮かぶ。そしてシュナイダー症の患者は抽象的運動が展開できないのであった。つまり自分の運動、空間を客観化、抽象化して捉える能力が弛緩したのである。

したがって抽象的運動のなかには、一つの客観化の能力、一つの〈象徴機能〉、一つの〈表象機能〉、一つの〈投射〉能力が内在しているわけである。尤もこの能力は、〈諸物〉の構成に際しても働くものであって、これはさまざまな感性的所与を相互に代表し合うものとして、またそれらすべてが集って一つの〈形相〉(eidos)を代表するものとしてとり扱う能力、それらの所与に一つの意味をあたえ、それらを内面から生気づけ、それらを体系にまで整理し、幾多の諸経験を同一の可知的な核にまで集中化し、それらの諸経験のなかにさまざまな展望のもとでもそれと認知できるような一つの統一性を現出せしめるような能力、一言で言えば、諸印象の流れの背後にその理由をなす一つの不変因子を準備し、経験の素材を形態化して来るような能力である（Merleau-Ponty 1945, pp. 140-141）。

つまり正常者に於いて客観的なものが、患者に於いては必ずしも客観的なものではないのである。そうであれば、客観が客観となるためには主観の能力に拠らなくてはならないというフッサールの主張を、メルロ＝ポンティの身体論は裏付けていたのである。

われわれはわれわれの経験の深部そのもののなかに客観の起源を見いださねばならず、われわれは存在の出現を記述せねばならず、また、逆説的なことに即自がわれわれにとつて存在する (*il y a pour nous de l'en soi*) のはどのようにしてであるかを了解せねばならない（Merleau-Ponty 1945, p. 86）。

という文は、『知覚の現象学』の身体論に於いて、議論を始める前のいわば前書き、心構えを書いた部分にみられるものである。身体論の目的を端的に示す文でありながら、これまでのメルロ＝ポンティ研究ではあまり目立たなかった一文であるように思われる。

客観の起源を主観の能力の内に見いだすというフッサールの現象学的企ての根幹を真に理解し、さらにその目的を果たしたのがメルロ＝ポンティの身体的な現

象学であったと、理解出来るのではないだろうか。

結論

第一節では、初めにデカルトの身体論と、現象学的身体論とを端的に比較した。デカルトは人間を“明晰判明な理性としての精神”と“物体としての身体”から成るものと解釈した。その後、機械論の心理学や生理学をはじめ、客観的諸学はデカルトの解釈を踏襲してきた。

彼の身体論は、フッサールの身体論にも影響を与えた。フッサールは身体の働きに運動感覚など現象学的概念を見いだすのであるが、精神の容器としての身体という考え方からは充分には離れられなかった。

しかしフッサールの企てから、さらに研究を進めたメルロ＝ポンティは身体を、物としてだけではなく現象として記述することに至った。記述の対象は客観化された主観ではなく、前客観的な水準の〈私〉である。つまりメルロ＝ポンティの身体論のテーマは“〈私〉が身体であるということ”とも言い換えられるのである。

第二節では、意識と不可分に現象している身体を記述することで、メルロ＝ポンティ以前の学では語れなかった能力としての身体による投射、指向性を確認した。身体的な指向性により、〈私〉は世界を状況化するのである。それは諸物や諸事に意味を見いだすということに他ならない。勿論そのような意味とは述定的な意味に限らず、前述定的な意味も含めてのものである。

身体現象の空間性を記述する際、通例からは特異な展開をする形態に出会った。メルロ＝ポンティの主張によれば、身体現象の空間性は外面的空間と身体空間の二重の地平をもつのである。シュナイダー症の患者には困難である抽象的運動は外面的空間の地平を経由して展開する。彼にも可能な具体的運動は身体空間の地平のみを必要とする。またシュナイダー症の患者は加減乗除は出来ても図形や数式の意味は理解しないという特徴も持ち合わせていた。

これらから分かることは患者には、客観的なことが、健常者と同様には現象しないということである。

患者においては客観化する能力が、それを働かせる指向性が弛緩したのである。つまり客観の起源が明らかになされたのである。ヨーロッパ諸学の客観性の起源は即自性ではなく、個々の具体的な主観の能力により基礎づけられることにあったのだ。

メルロ＝ポンティはシュナイダー症の症状から考察を始め、〈私〉の客観化する能力を含む指向性が展開する場としての前客観的世界を見いだした。本稿では客観的世界と前客観的世界の相違を十分に記述することが出来なかった。これは今後の課題である。

〔注〕

¹ 『知覚の現象学』では前客観的という語を、章や節を割り当てて主題的に扱ってはいない。しかし、この著書内の緒論を通して前客観的領野 (domaine préobjectif), 前客観的空間 (espace préobjectif) などの表現が散見される。つまりメルロ＝ポンティの思想の広域に関係する重要な概念として考えられるべきものである。

〔参考文献〕

- Descartes: *Méditations métaphysiques*, Librairie Générale Française, 1990
 (ルネ・デカルト『省察』山田弘明訳、筑摩書房、2006年)
- フッサール『デカルト的省察』浜渦辰二訳 岩波文庫 岩波書店 2001年
- E. フッサール『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』細谷恒夫 木田元訳 中公文庫 1995年
- MERLEAU-PONTY: *Phénoménologie de la perception* Editions Gallimard, 1945
 (モーリス・メルロ＝ポンティ『知覚の現象学』竹内芳郎 小木貞孝訳 みすず書房 1967年)
- 澤田哲生『メルロ＝ポンティと病理の現象学』人文書院 2012年
- 森脇善明『メルロ＝ポンティ哲学研究—知覚の現象学から肉の存在論へ—』晃洋書房 2000年

Merleau-Ponty – The Process of Objectification

Toru WATANABE*

In western thought, it has been thought that the object is one unto itself. Husserl proposed the idea that the object isn't in itself an entity; rather it becomes an object by the objectification that comes of subjectivity. Merleau-Ponty inherited this idea and explains how there is an inability to objectify un-body. In this essay, I follow the course of this consideration to reveal some features of the process of objectification in Merleau-Ponty.

In the first section, I review Descartes, who offered his argument of the body in western thought. He thought of un-body as an object. Husserl influenced by phenomenology, believed similarly. By comparison with these thinkers, Merleau-Ponty argues that the body is not only an un-object but also a phenomenon or an ability. He describes the body as the phenomenon in two layers; the *jambe (bras) fantôme* and *refoulement* are examples that *le corps habituel* and *le corps actuel*. Merleau-Ponty envisions *le corps habituel* and *le corps actuel* as an almost impersonal existence and a personal existence.

In the second section, I confirm Merleau-Ponty's description of space and the motion of physical phenomenon. He classified the motion of the Schneider subject as a concrete motion that a subject can perform (blow his nose, scratch a point where one is pricked by a mosquito, etc.) and abstract motions where a subject cannot (point at one's nose, etc.) He suggests that any given world has a background of concrete motion; a constituted world is a background of abstract motion. In other words, abstract motion is realized by the function of a construction of a physical *intentionnalité*. The ability to objectify is inherent in abstract motion. The physical *intentionnalité* connects we and our past, our future, our human environment, our physical situation, our ideological situation, and our mental situation, as it represents a frame of the *preobjective* world. At this juncture, this research demonstrates an interpretation that Merleau-Ponty finds the *preobjective* world as a place where we are

things; additionally, the *preobjective* world supports an objective world by a system of objective sciences.

In the third section, I show this interpretation's justification in the history of thought, a developmental view of objectification and its predecessors, phenomenology and Husserl's ideas.

* Student, Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University

